

中谷宇吉郎雪の科学館友の会会報

中谷宇吉郎  
雪の科学館友の会

# 六花

ROKKA

第64号  
2026年3月

ろっか（題字 矢田松太郎氏）

雪の科学館 4月4日(土) リニューアルオープン



中谷宇吉郎雪の科学館 事務室内にあるライブラリーより（写真：坂本のどか）

中谷宇吉郎は科学者として功績を残した一方で代表作、「冬の華」（写真左奥）をはじめとする彼が書いた文章も世代を超えて多くの人々の心に響きつづけています。それによって、科学への入り口を広げただけではなく、時には豊かな人生を導く指南書の役割を果たしたようでもあります。今後、会報では、宇吉郎が遺した数々のテキストを通して、科学者として、また一人の表現者としての横顔を探っていきたくと考えています。

（明貴）

NEWSLETTER OF THE FRIENDS OF NAKAYA UKICHIRO MUSEUM OF SNOW AND ICE

中谷宇吉郎雪の科学館 内 〒922-0411石川県加賀市潮津町イ-106 電：0761-75-3323 E-mail：yukinokagakukan@kagashi-ss.co.jp

# 中谷宇吉郎雪の科学館リニューアル・オープンにあたって

中谷宇吉郎雪の科学館館長 古川 義純

中谷宇吉郎雪の科学館は、2024年1月1日に発生した能登半島地震による災害からの復旧工事を行うために、昨年4月から1年間にわたり休館をしていました。その工事も無事に終了し、2026年4月4日にリニューアル・オープンを迎えることになりました。今回の工事は、建物の外構や設備、および周辺環境の修復が中心であったために、科学館の展示等には大きな変更は加えられていません。しかし、開館以来、長期にわたる休館は今回が初めてでしたので、これを機会に展示内容に関しても可能な限りのリニューアルが施されました。新しく、そして綺麗になった科学館にぜひもう一度足を運んで頂きたいと思います。



本科学館は、中谷宇吉郎の人となりを紹介する人物館の側面と雪と氷の関する科学を分かりやすく紹介する科学館としての側面という、極めてユニークな特徴を持っています。科学館としての側面を強化するために、近年では北海道大学低温科学研究所（中谷宇吉郎がその創設に深く関わった研究所）との連携を強化するなど、最新研究の成果を取り入れる努力を行ってきました。再オープン後も、この関係を継続することで、雪や氷の科学の基礎から最先端の成果までを分かりやすく発信する取り組みを継続してまいります。

また、この科学館のもう一つの大きな特徴は、中谷宇吉郎の次女である中谷芙二子さんの霧の彫刻の作品が常設で展示されていることです。芙二子さんは、科学的な知見や技術を基に、人と自然、環境との関係を体験的に捉え直す作品を手がけてこられた世界的に著名な芸術家です。本科学館は、芙二子さんの作品を常設で見ることができる世界でも数少ない施設の一つです。これは、中谷宇吉郎の科学のこころと芙二子さんの芸術のこころが融合することで生まれた、唯一無二とも言える作品です。科学館が再オープンするにあたり、この二人の関係性をより鮮明な形で感じ取っていただくことを期待してやみません。

雪と氷の科学と芸術の殿堂「中谷宇吉郎雪の科学館」が、これからもますますの発展を遂げることができるよう、皆様の応援を心からお願い致します。

## 展示会・講演会の開催

9月9日(火)から23日(火)にかけて加賀市立中央図書館ロビーにて中谷宇吉郎展を開催しました。加賀市は中谷宇吉郎の出身地ですが、雪の科学館のお膝元でもあるため、これまでこのような展示会は科学館外では開いていませんでした。しかし科学館開館30年を経て、かなり以前に科学館を訪れたきりの市民も多いと思われ、工事休館期間を利用してこの企画を開催しました。不特定多数が見学するロビー展示のため、現物資料は少なくし、写真や図解パネルを主とした展示としました。

これにあわせて9月14日(日)には同図書館にて神田健三顧問による「中谷

宇吉郎と雪の科学館の30年」と題した講演会を開催。参加者は41人でした。

両事業は江沼地方史研究会の共催で開催、講演会の最後には同会会長の見附裕史さん（元加賀市学芸員）が科学館設立時の話を語る場面もありました。



## 初めての長期休館

中谷宇吉郎雪の科学館学芸員 石川 真知子

当館は、2024年元旦に発生した能登半島地震による館周辺被害の復旧工事のため、2025年4月1日より約1年間、長期休館いたしました。

休館期間中は、資料整理や目録作成、施設メンテナンス、工事関係者との調整に加え、宇吉郎ゆかりの地の調査や友の会主催行事への協力、再開館に向けた準備など、通常開館時には十分に取り組みなかつた業務を、職員2名で手分けして計画的に進めてまいりました。

また、この1年の間、より良い形で再開館を迎えるために、中谷宇吉郎記念財団や加賀市と連携し、協議を重ねてきました。地震による被災で長期休館となったことは残念ではありますが、昨年度には開館30年という節目を迎え、多くの皆さまに支えられていることを改めて実感する貴重な期間ともなりました。

これからも、科学を身近に感じていただける展示や体験を充実させ、皆さまに楽しく学んでいただける科学館を目指します。



展示のリニューアルについて検討



工事関係者との話し合い



地震前は、川岸がまっすぐに整っていた。  
(2018年11月27日・館職員撮影)



地震後は川岸が歪み、ところどころ陥没が見られる。  
(2025年4月7日・館職員撮影)



桜の木々が剪定され、川岸の歪みを整えるため、埋め立て工事が行われている。(2026年2月26日現在・館職員撮影)

## 中谷宇吉郎記念財団について

一般財団法人中谷宇吉郎記念財団 寺垣 ゆりや

### 中谷宇吉郎記念財団

一般財団法人中谷宇吉郎記念財団は、宇吉郎が遺した多彩な活動や事績の資料を集大成して公開すること、また、宇吉郎の自然と科学に対する思い（科学の心）を、現代そして未来へと引き継いでゆくべく、2015年5月1日に東京都渋谷区の前原グリーンランド内に設立されました。設立時の代表理事は、宇吉郎長女で地質学者の中谷オルスン咲子（2020年7月に逝去）でしたが、咲子は当時米国在住であったため、実質的には、宇吉郎次女で霧の彫刻家として知られる中谷芙二子理事（現・代表理事）を中心に、運営を続けてきました。

財団のベースとなる活動として、アーカイブの整備を行なっています。将来的には、前原グリーンランドの未着手の所蔵資料をはじめとする、各所にあるアーカイブや資料を一元化し、加賀市に中谷宇吉郎アーカイブセンターを設立することを目指しており、昨年、片山津に活動拠点兼ギャラリーにもできる場所を確保しました。また、当財団は2020年より、加賀市総合サービス(株)とともに、雪の科学館の指

定管理業務を受託しており、資料の保存・展示などの協力を行なっています。その他、中谷宇吉郎本人や雪の結晶の写真等の貸し出し要請への対応も日々行なっています。

さらに、財団は国内外において中谷宇吉郎及び雪・氷をテーマとした展覧会や企画協力を継続的行なっています。2016年には、ラトビア共和国の首都リガにて写真展「雪の結晶・火花放電」を企画・共催し、中谷宇吉郎が撮影した雪の結晶及び火花放電の顕微鏡写真を紹介しました。本展は国際交流基金の助成を受けた海外での本格的な展覧会として高い評価を得、ラトビアを皮切りにスウェーデンやノルウェーなど北欧の複数都市へ巡回し、各地で紹介されました。直近では、2022年に東京都渋谷区の前原の家で開催された「『天から送られた手紙』に触れてみよう～雪と氷がおしえてくれること～」において、中谷宇吉郎の紹介と展示、ワークショップを実施し、東京都多摩六都科学館「ちきゅうラボ」においては、2023年以降、毎年冬季に行われる雪をテーマとしたミニ展示に毎年協力しており、子どもから大人まで幅広い層に向けた教育普及活動にも取り組んでいます。



ラトビア共和国リガでの写真展ポスター



景丘の家での展示



多摩六都科学館での展示 写真提供：多摩六都科学館

## 雪の科学館リニューアルオープン

中谷宇吉郎雪の科学館は能登半島地震による施設被害復旧工事のために2025年4月から1年間休館していますが、この機会に展示室内のリニューアルも行なっています。当財団は、加賀市及び雪の科学館の協力の下、展示室のデザイン、改装工事等を中心となって実施しています。時間的及び資金的な制約から大々的な改装とはならないものの、今までとは

少し印象の違う展示室になる予定です。中谷宇吉郎のひとりとなりを紹介するコーナー、物理学者を目指すことになった背景を説明するコーナー、雪と氷の結晶の研究を説明するコーナー等のほか、中谷宇吉郎の研究のフィールドの広がり説明するコーナーを加える予定です。また、来館者に人気のある実験コーナーは少しスペースに余裕をもたせるようにします。



展示室イメージ図(実際の展示とは異なる場合があります)

### 「シモバシラ」の氷の花

愛知県会員 山田 功 (2026.1.27投稿)

名古屋も最低気温が0℃以下が続いております。この寒さのため、私の住む団地の隣の公園では、植物「シモバシラ」が、美しい氷の花を咲かせております。

雪の科学館では、武田一夫先生の写真展「シモバシラが魅せる氷の世界」がありました。茎にできた氷を真上から見た写真は少ないかと思い、今回撮影をしてみました。バレリーナの衣装のようなしなやかな氷が見られました。



## 雪と氷のワークショップ

会長 柏田 剛明

本年度の友の会主催での雪と氷のワークショップは千葉県白井市で開催しました。これに加えて東京都西東京市の多摩六都科学館が主催するワークショップに友の会が共催しましたので、あわせて紹介します。

### 白井市でのワークショップ



白井WS スタッフ 左から渡辺サポートセンター長、大平、福田、佐々木、柏田、今泉、田淵、ボランティアの高校生、柏田

雪と氷のワークショップin白井は8月10日(日)に開催しました。六花第62号でお知らせしましたように、遠方への旅費は子供ゆめ基金の助成対象外となりましたので、昨年度の石岡と同様、加賀からは講師として柏田のみが行き、ほかのスタッフは関東在住の皆さんにお願いしました。今回、私は実験用具一式を乗せて乗用車で向かいました。私の車は車内にAC100V15Aコンセントのあるハイブリッド車で冷凍庫に氷を入れたまま運べるので、梱包して宅配便で送る手間と費用も削減できました。



会場の白井市役所

白井市は千葉県の北西部、下総台地上に位置し、人口は約6万人。北総鉄道が開通したことで人口が飛躍的に増加しました。梨の産地として有名です。会場のしろい市民まちづくりサポートセンターは白井市役所内にあり、市のコミュニティー活動の拠点施設です。開催にあたってはサポートセンターの仲介により中～大学生のボランティア4名もスタッフとしてお手伝いいただきました。

これまで同様、前日の午後は会場設営とリハーサル。お借りした多目的スペースは広くてゆったりと配置できました。

当日は風雨の激しい日でしたが、白井市教育委員会を通じて白井市内の全児童にチラシを配布していただいたおかげで、午前、午後の2回計で子ども37人、保護者46人、計83人が参加してくれました。スタッフは友の会会員が千葉県の福田幹事、茨城県から今泉さん、田淵さん、太平幹事、東京都から佐々木さん。それに地元白井市で開催準備に尽力してもらった私の親族の柏田さんとボランティア4名でした。



シャボン膜についてのダイヤモンドダストがきれいに6方成長した



チンダル像はできたかな？

プログラムは①中谷宇吉郎と雪の研究について(講義) ②雪の結晶(レプリカ)のスマホでの観察・撮影 ③ダイヤモンドダストの実験 ④氷つりの実験 ⑤チンダル像の実験 ⑥氷のペンダント作り と、いつもどおりの進行。5班に分けた各テーブルからは歓声上がる好評でした。



みんなではいポーズ！

## 多摩六都科学館でのワークショップ

11月3日(月・祝)には東京都西東京市において雪と氷のワークショップin多摩六都科学館が開催されました。多摩六都科学館は、小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市(1994年の開館時は田無市、保谷市)の5市が設立、榎乃村工藝社が指定管理者となり運営する科学館です。



会場の多摩六都科学館

当事業は同館学芸員で友の会員でもある佐々木さんが、同館主催の事業として企画、私や友の会員を講師、スタッフとして招いてくださるというかたちで実現しました。これは本年度より公共施設の事業でも、その指定管理者の自主事業としての開催なら子どもゆめ基金の助成が受けられることとなったことを受けての企画でした。

スタッフは友の会から講師の柏田と東京都の江口さん、茨城県の今泉さん、田淵さん。館職員でもある佐々木さん。それに館職員2名、ボランティア3名の計10名です。



多摩六都科学館 WS スタッフ 左4人は館職員・ボランティア、その右から柏田、今泉、田淵、佐々木、江口、館職員

今回も私は前日に実験用具一式を乗せた乗用車で向かいました。会場の科学学習室はさすが科学館の実験室、申し分のない設備の部屋でした。昼食の後リハーサルをして明日に備えます。

当日は午前、午後の2回計で子ども38人、保護者34人、計72人が参加してくれました。プログラムは



氷釣り大成功!

これまでと同じですが、時間は館側の都合で従来の120分から90分間に縮めました。



最後は参加者全員で記念撮影

今回も子どもたちの反応はよかったです。特に今回は普段から科学館に来ている子どもたちが多かったためか、深く知りたい子もいました。ワークショップを終えたあとで6年生の女の子が夏休みの自由研究のレポートを持って来てくれましたが、平松式のペットボトルでの人工雪づくりをしたそうです。普通の水に加えて色水でもやってみたけど、色付きの雪はできなかったと話してくれました。

## 今後の開催地を募集中!

本年は今のところ8月9日(日)に富山県射水市での開催を予定しています。詳細は次号でお知らせする予定ですが、お近くにお住まいの方はご協力をお願いします。

この事業は今後も開催していきたいと思っています。身内の児童を参加させたい、雪と氷の実験を(スタッフとして)体験したい、他の友の会メンバーと触れ合いたい、そのほかどんな動機でも結構です。ご希望があれば是非、事務局にご相談をお願いします。

## 2025年度総会

2025年度中谷宇吉郎雪の科学館友の会総会は7月5日(土)片山津地区会館テリーナホールにて9名の出席で開催されました。

本年度は役員改選の年で、事務局長に高齢で引退される東川さんにかわり明貫紘子さんが、また幹事に長耕平さんが新たに選任されました。



# 東川町大雪山アーカイブス「中谷宇吉郎 大雪山を解く」展の鑑賞と 旭岳ビジターセンターの展示紹介について

北海道会員 山崎 敏晴

北海道のほぼ中央に位置し道内最高峰である旭岳の中腹にある旭岳ビジターセンターで「中谷宇吉郎 大雪山を解く」展が2025年12月1日から2026年3月1日まで開催されています。

この企画展は旭岳の麓、東川町のせんとぴゅあⅡ（図書館）が定期的にビジターセンターで開催する出張展示で、この冬のテーマは“大雪山”と“中谷宇吉郎”です。



ビジターセンター内の企画展会場

道内で中谷宇吉郎に関係した企画展は、2020年の「中谷宇吉郎生誕120年記念行事」以降、久しぶりとなります。

展示内容を簡単に紹介すると、大雪山に関係した宇吉郎の随筆が載った著書、雪の結晶の写真集『天から送られた手紙』、また今回の展示では、大雪山での雪の研究以外に忠別川での洪水調査『大雪山系及び洪水の研究』や大雪山の積雪水量と流出調査『大雪山積雪水量及び流出調査』などを展示して、大雪山に降り積もった雪が伏流水として恩恵を受けて暮らしている東川町民だけではなく、多くの道民の暮らしに直接関わるものだけに興味を持っていただけそうな内容となっています。



故・東兎氏の観察ノート

ほかにも故・東兎氏の寄贈資料から「雪結晶分類 於 大雪山仰岳荘」と記された手書きのノート（1950年2月）や「雪の結晶写真1951」と「同1952」には1950年の撮影後に内容をまとめた記録とみられノート、大雪山の冬山を撮影したモノクロ写真も展示されています。

旭岳ビジターセンターは、大雪山国立公園の情報発信の場として2019年6月にオープンしました。ここの標高は約1050mで宇吉郎が天然雪の観察を行った十勝岳中腹の旧白銀荘と同じような標高にあります。施設は環境省が設置し、東川町が管理運営を受託しています。

センター内には宇吉郎に関係した展示や映像が常設され何時でも自由に見ることが出来て、これには神田健三氏もご協力されています。



監修した映像を前にした神田健三氏

レクチャールーム内では大雪山の四季折々の自然と絶景を観ることが出来る映像が用意されています。

その一つ、神田健三氏が監修し環境省が制作した「大雪山の美しい雪の結晶」は、宇吉郎に関係した内容や綺麗な雪の結晶が何点も映し出される内容です。

また、レクチャールーム外側の回転式壁に描かれた、“大雪山と人との関わり”には、昔から今までのあらゆる時代に大雪山と関わりのある人物を紹介していて、その一面には中谷宇吉郎と吉田六郎氏を紹介したものもあります。



回転式壁の紹介パネル

## 事務局長就任のごあいさつ

明貫 絢子



初めまして。また、ご無沙汰している方もいらっしゃると思いますが、あらためまして、このたび中谷宇吉郎雪の科学館友の会事務局長に就任いたしました、明貫絢子(みょうかん・ひろこ)と申します。

私の母は加賀市出身、父は能登町出身で、いわば加賀と能登のハーフです。かほく市育ちで、高校卒業後は茨城県の大学へ進学し、埼玉、東京、デュッセルドルフでの仕事を経て、2019年にドイツから加賀市へ拠点を移しました。現在は、夫であり友の会メンバーでもある木村悟之とともに、「映像ワークショップ」という、アーカイブと映像制作を軸にした会社を運営しています。

専門はメディアアートで、アーキビスト/キュレーターとして活動しています。近年は、アニメの中間制作物に関する資料調査や展覧会企画にも携わっています。また、国際的に活躍するアーティスト中谷芙二子さんが1980年に開設した「ビデオギャラリーSCAN」について、学会発表を目的とした個人的にリサーチを行ったこともあります。コロナ禍にあたった中谷宇吉郎生誕120年の年には、オンラインイベント「ナカヤ君 120回目の誕生日おめでとう」(2020)で司会を担当しました。また、「アートと科学、そして温泉文化」をテーマに、片山津温泉ファンZine『イグアノドン』を創刊しました。私が加賀市で文化的な活動を続けられている原動力のひとつには、中谷宇吉郎、治宇二郎、そして芙二子さんの存在があります。



「イグアノドン」創刊号。詳しくは以下からプロジェクトサイトへ。イグアノドン・オンライン記事もあります！



1995年に雪の科学館を初めて訪れました。当時大学生だった私は、帰省の際、母が小松空港へ迎えに来てくれたついでに連れてきてもらったと記憶しています。母にとっては、併設のカフェがお気に入りの場所でした。初めて雪の科学館を訪れてから30年以上が経過したことに驚きつつ、さまざまなご縁が重なり、友の会の運営に関わらせていただくことを、大変光栄に思っています。全国にいらっしゃる会員の皆さまとの世代を超えた交流を大切にしながら、友の会の活動を進めてまいりたいと考えております。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

少し前の話ですが、2005年の冬に加賀市から旭岳に来て「親子雪教室」に参加された方もいらっしゃると思います。旭岳に泊まり雪遊びや雪の観測、また地元東川町の方との交流もされたと思います。

この事業はその後も継続され、宿の前には大きな雪洞が作られ、雪が降ってくると深夜にも関わらず、暗い夜空から静かに降ってくる雪をとらえてレプリカ作りを行うなど、宇吉郎が観察した同じ場所で同様の体験ができたことは良い経験だと思います。

そのような事から旭岳は雪の科学館とも密接な関係があり、“宇吉郎 ゆかりの地”とも言えます。

なお、第1回に私たち親子も参加させていただきました。

その時、ルーペで雪の結晶を観察してはしゃいでいた小学生の娘も今は3児の母です。



雪洞の前で雪の観察 (2010年12月)

おわりに「大雪山アーカイブス」の説明をします。

東川町在住であった山岳史家 清水敏一氏(故人)が町に寄贈した大雪山に関する膨大な文献や資料を中心に「大雪山アーカイブス」が開設されました。今回の展示では、ここの資料を中心に展示内容が企画されたようです。



右：清水敏一氏(故人) 左：筆者

### 追記

NHKアーカイブスに“きょうは なんの日 昭和あの日”があり、それによると“1月28日は昭和25年に「中谷博士が大雪山中で研究を始めた日」と書かれています。ブラウザ上部のアドレスバーに以下のURLを直接入力して開くと“雪にいでむ科学者たち 雪の結晶レプリカの作成 昭和25年(1950年)”と題した1分程の動画が無料で見られます。

<https://www.nhk.or.jp/archives/nannnohi/shouwa/0128/>



中谷宇吉郎とはどのような人なのかその一端を書いてみます。

### 1. 1959年（昭和34年）の側面

中谷宇吉郎(以下宇吉郎)は病死3年前の59歳だった。当時の日本は高度経済成長期の入口で活況を呈していた。スマホはまだ無くメディアの主流は新聞だ。

宇吉郎は5月にグリーンランド出張、ウズホールの物理学会に出席、北極海の氷島T3の視察等多忙だった。一方私は19歳の世間知らずの学生だ。宇吉郎の随筆に熱中し始めた頃だった。と同時に宇吉郎という人に興味津々の時でもあった。

そんなある夕方、帰宅して夕刊に目を通した。5月31日毎日新聞の社会面に引き込まれた。コラム「憂楽帳」の新執筆者の囲みに宇吉郎の名前と顔写真を見つけた。当時第一線の文化人7名の紹介があり、科学者は宇吉郎のみだ。(当時の私のスクラップ帳のコピー添付)

私は宇吉郎という人は日本のオピニオンリーダー(御意見番)なのかと初めて知った。驚くと共に何かうれしかった。

当時の有力紙に、短文のコラムとはいえ連載が始まる。お茶の間を通して、宇吉郎の意見が日本に影響を及ぼすのかと誇らしかった。その執筆の一事例として、6月11日(木)の「裁判と常識」を66年前の切り抜き帳からコピーして添付した。

そうか宇吉郎という人は物理学者、科学者専門以外の分野にも意見を言える人なのだとの理解は広がった。

### 2. 宇吉郎の御意見番としての魅力

当時の切り抜き帳の後のほうには読売新聞の夕刊「随想」コラムに宇吉郎の「王子ストの後日談」(昭和35年1月30日)の寄稿も貼ってあった。後になって昭和36年12月に宇吉郎の最後の随筆集「太陽は東から出る」(新潮社)に気付いた。この本は次の3部構成からなっている。

- 1部は昭和36年1月より6月迄の週刊新潮掲載34件、
- 2部は昭和34年4月より6月迄週刊文春掲載10件、
- 3部は昭和35年頃の「宇宙開発と人間」の題目で12件。

内容は当時の主力週刊誌に掲載されたものをベースに加筆したもので理解しやすくなっている。誰にも付度なく 思う通りを堂々と自由に書いていると受け止めた。病魔を自覚しつつ遺言かの如く真に迫る内容で多くの人々から共感を受けただろう。

何故、かくも国民から求められ支持された御意見番なのか。それは本の表題にもなっている「太陽は東から出る」に徹した提言によると思った。私もこの基本を学び、賛同している。

宇吉郎はその基本・心について128頁に次のように書いている。

「太陽は東から出る。それは善いことでもなく、

毎日新聞 夕刊 昭和34年(1959年) 5月31日 (日曜日)



昭和34年(1959年) 6月11日 (木曜日)



悪いことでもない。又好き嫌いの問題でもない。ただ東から出るだけのことである。

こういう見方で、この頃の世相を観察してみようと思った。」

更にあとがきには

「なるべく問題を客観的に見て、人間のはいった現象を、広い意味での一つの自然現象として記述するつもりで、筆をとった。」

とも書いている。

それ迄の宇吉郎は人の関与しない自然現象を対象に長年研究を続け多くの業績を残してきた。

その卓越した物理学者が人間が主体の社会問題に同じ手法を適用した。すなわち多くの人が係わってくる社会問題は、往々にしてそれぞれの人が自分に有利になるよう解決策を求めたがる難問が多い。そこに宇吉郎は問題の本質をデータ化、客観化し、その現象を見抜き、裁定を下した。この手法に私は引かれたのだ。

### 3. 今の時代 「宇吉郎のような人」を

宇吉郎の「太陽は東から出る」の手法を加味した提言は当時の日本の針路策定に役に立ったと思っている。

1959年頃と比較して今の時代は全く変わった。要は多様化、複雑化している。

当時では問題にならなかった課題が新しく発生している。例えば、スマホ・SNS・AI・原発・再エネ・プラスチック塵・インフラ老朽化・少子化・移民・差別等々多々あろうか。更に私たちの日常生活でも情報過多のような難題ももちあがっている。情報が多く、速いことは生活を便利にする。その反面いわゆるフェイク情報も増えている。この課題に対しては受けた情報を客観化（裏付けデータを求める等）する手法は役立つだろう。要は今の時代でも各人が自分の行動に宇吉郎の客観化手法を活用すれば新たな難問を改善出来る道はあろう。

現在、日本の国際競争力の指標は低下し、日本国は衰退傾向にありますでしょうか。

私は宇吉郎の多くの随筆を読み、宇吉郎その人はどのような人かを広く学んできました。（例えば「六花」44号8頁）

その結果、今こそ宇吉郎のような人を日本は必要としていると思うに至りました。

### 4. 友の会の役割は

「中谷宇吉郎雪の科学館」の友の会は1998年7月4日に発足した。科学館と両輪で活動が続いている。会報の「六花」創刊号には友の会の目的の一つとして「中谷宇吉郎の人と業績や雪氷等について学習し研究する」と掲げられている。要は宇吉郎の人と業績も友の会で勉強できるようになっている。本題の「宇吉郎のような人」を知るには最適な会だ。

現状、「六花」の内容は雪、氷関連の記事が多い傾向にあると思っている。

バランス上もう少し宇吉郎の人物像に関する紙面を増やしてもよいと思う。宇吉郎から直接指導を受けた方、又はその確かな伝聞を持っている方は少なくなっている。いわゆる“宇吉郎の語り部”の「六花」への寄稿は貴重になってしまった。今となれば宇吉郎その人を知るには宇吉郎が書いた書物から学ぶのが手っ取り早いでしょう。その中でも「冬の華」シリーズの随筆を中心に読んで宇吉郎の人となりや学ぶのも効果的でしょう。今迄宇吉郎に余り馴染み無い方は次のステップで会の活動をされる方法もあります。

- ① 先づは宇吉郎の随筆集の目次をめくり好きそうな随筆を読んでみる。
- ② その感想文、好きな点等を「六花」に投稿してみる。
- ③ 投稿した内容を総会、イベント会場等で友の会員とお話し合ったり、ベテランの会員から示唆を受けたりする。
- ④ このような会員同士の親睦、交流を遠慮なく自から広げて行く。会員同士の親睦をもっと多くするよう活動する。
- ⑤ 会員以外の親しい友人に宇吉郎とはこういう人だと話し合ったりする。

このようなステップでも宇吉郎とはどういう人かの学びは深まりましょう。

こうして「六花」を基点に宇吉郎とはこういう人だと日本に広めてゆき、将来「宇吉郎のような人」が増えればと願っています。

「六花」、友の会がその芽吹き役を果たすことが出来れば雪の科学館も報われましょう。

初めて投稿される方をも、多くの会員は楽しみに待っております。

(2025・7月記)

読書感想文を募集  
一冊の本からはじまる中谷宇吉郎

友の会ではあらたな試みとして、会員のみならず読書感想文を募集します。2つの部門を設けましたので、お気軽にご応募ください。いただいた感想文は次号以降、会報に掲載予定です。

1. 課題図書部門：「イグアノドンの唄：大人のための童話」

<本について>

随筆集『イグアノドンの唄』文藝春秋新社(1952年)におさめられたテキスト。宇吉郎一家が疎開のために、冬の北海道で雪ごもりで持ちこたさだだったときに、たまたまカバンに紛れ込んでいた、コナン・ドイルの『失われた世界』を子供たちに読んで聞かせたことが書かれています。そこで、宇吉郎はこの本を子供たちに読んで聞かせる前に、1938年に発見された絶滅したはずの太古の魚について、本当に起きた科学的エピソードを披露します。そして、ヒマラヤの巨人伝説についても、科学的分析を試みています。

タイトルは、宇吉郎の長男、中谷敬<sup>けい</sup>宇が終戦の年(当時10歳)につくった「イグアノドンの唄」に由来します。この随筆集は、2部全24篇から構成され、その内容は多岐にわたっています。しかし、一貫して平和を願い、戦後復興と経済成長の過程で日本の風土が破壊されていく危機感が重低音のように響いています。

今回はその中から、「イグアノドンの唄：大人のための童話」を選びました。世界各地で紛争が絶えない今、あらためて戦争のない未来を皆さんと展望できればと考えています。

○初出：「文藝春秋」1952(昭和27)年4月1日

○青空文庫：



<要項>

○文字数：最大200文字

○感想文タイトル、お名前(ペンネーム可)をお願いします。

○応募方法：メールまたは郵送(送り先は表紙下部)

\*メールで応募の場合は件名を「六花(課題図書)」とし、原稿データを添付してください。

○締切：2026年4月30日

2. 自由図書部門：中谷宇吉郎が書いた、出版されている本を自由に選んでください。

<要項>

○文字数：最大1200文字

○書名、感想文タイトル、お名前(ペンネーム可)をお願いします。

○応募方法：メールまたは郵送(送り先は表紙下部)

\*メールで応募の場合は件名を「六花(自由図書)」とし、原稿データを添付してください。

○締切：2026年4月30日

主なスケジュール

□ 4月4日(土)

雪の科学館リニューアルオープン

□ 4月11日(土) 10:00

中谷宇吉郎命日 加賀市中島町墓地

□ 4月25日(土) 10:00~11:00

白山の雪形ウォッチングの会

雪の科学館視聴覚ホール 高校生以下無料

□ 7月4日(土) 12:30~17:00

友の会定期総会&宇吉郎ゆかりの地巡り

□ 雪の科学館2026夏休み特別企画

雪の結晶の万華鏡展

期間：7月16日(木)~9月29日(火)

雪の万華鏡づくり

講師：いしこ ゆか さん(万華鏡専門店プリズム)

日時：8月22日(土)

13:30~14:30/15:00~16:00

編集後記

前号のこの欄にて役員の高齢化を嘆いていましたが、今年度から若手が2名加わっていただくことになりました。特に事務局長の明貫さんは会報発行、会計などの事務方を担っていただくことになり、感謝、感謝です。

総会に引き続き開催の役員会にて、最近の友の会は中谷宇吉郎の文筆家の面の比重が低くなっているという意見がありました。確かに六花の記事を見ても創刊間もない頃より宇吉郎の随筆に関係する記事は少なくなっています。そこでこれまで宇吉郎の著作にふれていない会員のかたにも、これを機会に読んでいただければと、読書感想文の募集をおこないます。ほんの一言のメッセージで構いませんのでお寄せいただければ幸いです。

次の総会の際には久しぶりに宇吉郎ゆかりの地巡りを実施することとなりました。詳細は5月か6月に発行予定の次号でお知らせしますが、12:09加賀温泉駅着のかがやき507号にあわせて7月4日(土)12:30加賀温泉駅集合でゆかりの地巡り、雪の科学館見学、総会のセットといたします。参加費無料ですので、ぜひご参加お願いいたします。

今号の発行が例年より大幅に遅れましたこと、おわび申し上げます。館リニューアルの内容を少しでも入れたいと思い発行を遅らせたのですが、原稿締め切り時点でも未定の部分が少なくなく、結局、詳しい紹介はできませんでした。できれば4月4日の再オープンの後には是非ともご来館いただき、直接ご確認下さるようお願いいたします。

T.K